中学校の部

優秀賞

思春期の私とふるさと

由布市立湯布院中学校 3年

すずき ちよ
鈴木 千陽

私には大好きな道があります。それは通学路です。遅刻しそうになりながら全力で走る通学路も友達と笑いながら歩く通学路もときには学校に行きたくない涙を流しながら歩く通学路も全部大好きです。なぜなら通学路を歩きながら見る景色は私の悩みを一瞬で晴らしてくれるからです。

元々私は自分のふるさとの魅力が正直全く分かりませんでした。魅力が聞かれても、「自然」や「人の温かさ」などありきたりなことしか出てきませんでした。コンビニも少ない。有名な飲食店もない。都会に行ったらもっとたくさんのお店に行けるのにと小学生の頃までは思っていました。

私は中学生になってから心の成長を感じるようになりました。友達との人間関係、家庭での小さな反抗、思春期の私には些細な事でもすぐに引っかかるようになりました。前みたいに色んな人と気軽に話したいのに話せない。反抗したいわけじゃないのに小さなことで反抗してしまう。自分のことなのに自分の感情が全く分からない日々を過ごしていました。そんなある日のことです。私はいつものようにぼーっとしながら学校に行っていました。いつもなら気分が上がらず、自分の足元だけを見て、気づいたら学校に着いていると言う流れだったのですが、その日はなぜか前を向いたのです。前を見た瞬間、私は言葉を失いました。そこに広がっていたのはびっくりするほどきれいな私の小さなふるさとの景色でした。海のように真っ青な空。底が見えるほど、透き通っている川の水。どこを見渡しても真緑の景色でした。それを見た瞬間、心の中にあった悩みは消えました。暗闇の中からいきなり光が差したように私の心は明るくなりました。また、自分が気づかなかったふるさとの魅力がいつも通っている通学路にあることにびっくりしました。その日はずっと景色を眺めながら登校しました。次の日も「あの景色をもう一度見たい」と強く思ったので、早く起き、余裕を持って登校しました。次の日もその次の日も朝起きるのが大嫌いな私が早く起きて登校しました。こんな日々を繰り返していると気づいたらふるさとの四季を全て見ることができました。春は新学期だとドキドキしながらも花粉にやられ、くしゃみをし、桜を眺めて登校しました。夏はセミの鳴き声と一緒に鼻歌を歌いながら汗をふいて、登校しました。秋は紅葉を見ながら友達と、「もう1年も半分以上が終わっちゃったね」とさみしさや希望を抱きながら登校しました。冬はカイロを握りしめ、顔の半分以上をマフラーでおおい、素手で雪を触って友達と「寒いね」と笑いながら登校しました。こうやって、1年が終わる頃には私の悩みは完全にどこか知らない遠くの場所へ飛んでいきました。

これは通学路が教えてくれた魔法だと私は思います。大して知りもしなかった自分のふるさとの魅力が思春期の私の悩みを一瞬で解決してくれました。中学生という1番難しい時期に自分のふるさとの魅力に気づけて良かったなと心から思っています。私のふるさとはコンビニも少ないし、有名な飲食店もないけど心を落ち着かせてくれて、悩みも解決してくれるステキな道があります。また、夢と希望に満ち溢れていて、大げさかもしれないけど私の心の支えです。ふるさとの有り難みを忘れないように、私はこの道を、このふるさとをずっと大切にします。